

河北鴻 かほくがた



NPO法人河北鴻湖沼研究所通信

Vol.15 No.3



河北鴻湖沼研究所設立 15 周年

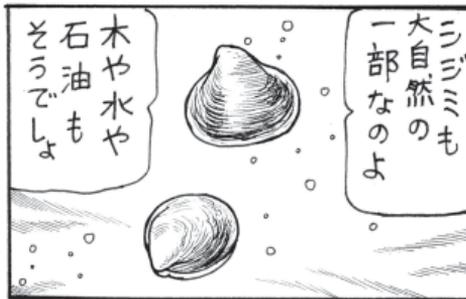
- これまでの取り組みを振り返り、
地域の中での役割を再確認 -

河北鴻湖沼研究所の誕生は、1994年10月14日のホテル坂での会合に遡ります。社団法人をつくるための準備に参加した主だったメンバー17名が集まったもので、同年12月20日の第2回目の会合において、前回を含め法人設立のための発起人会とすることを了承しました。法人設立の準備と並行して、95年より連続講座「河北鴻自然保護学校」の開講、賛助会員としての「友の会」会員の募集、高校生と外国人留学生による国際交流と自然保護を目指した「河北鴻共和国」の取り組み（後援）など

の地域活動をおこなってきました。その後、協賛企業の確保や現実的な組織のあり方や運営についての議論を重ねる中、ふさわしい法人の形としてNPO法人を目指すことになり、99年8月に石川県で最初の環境NPO法人となりました。数えて15周年の昨年11月29日にNPO法人河北鴻湖沼研究所15周年記念イベントとして、座談会「河北鴻と研究所と私」と車座ディスカッション「NPO河北鴻湖沼研究所は必要か？」をおこないました。延べ60名以上のご参加をいただき、これまでの歩みを振り返るとともに、河北鴻湖沼研究所が地域で果たしてきた役割と今後の活動の展望について語り合いました（関連ニュース3P）。

第15回 シジミ

カコちゃん ショウくん
かほくがたナルドレシ



河北潟とシジミには深い関係があります。旧宇ノ気町の上山田遺跡の貝塚からもヤマトシジミの貝殻がたくさん出土したとのことで、太古から潟縁の人々の食用となっていたようです。干拓前の河北潟でも、シジミ漁がおこなわれていました。シジミ漁は当時の地域の経済を支える重要な産業の一つであり、潟縁の住民にとって、自給自足の貴重なタンパク源でした。シジミ漁の漁業権は河北潟の南部地域（金沢側）にのみありましたが、漁というほどでもないシジミ採りは内灘や津幡でも行われていました。こどもたち、特に女の子は、放課後の家事の手伝いの一つとして、シジミ採りをしたそうです。そうした経験を持つ方に聞き取りしたところ、膝くらいまでのところの深さで、きつく締まった硬い砂混じりの土のところでシジミが良く採れたそうです。聞き取り数が少ないので、生息に適した場所の詳細は不明ですが、泥の多いところはあまり好まないようです。筆者は青森の小川原湖や島根県の宍道湖でみたシジミも、砂の多い底質のところにいたように記憶しています。

干拓以前の河北潟で採れたシジミは、ヤマトシジミでした。ヤマトシジミは、川の水と海の水が混じる汽水に生息します。現在、河北潟は淡水湖になっていて、湖底にはシジミは生息していないか、きわめて少ないと思われる。一方、河北潟の周りの川や水路には、流れのある淡水に生息するマシジミがいます。このマシジミも、ヤマトシジミと同様に食用とされますが、漁獲量はきわめて少なく、市場に出回することはほとんどありません。筆者は、福井県の今庄の旅館に泊まったときに、運良く朝のみそ汁でいただきました。その他のシジミとしては、琵琶湖流域だけに生息するセタシジミがあります。これは、琵琶湖周辺では流通してい

ますが、もともと多産して名前の由来ともなっている「瀬田川」では、現在はほとんど採れなくなっているようです。滋賀県水産課によるとセタシジミの漁獲量は、「かつて、琵琶湖漁業全体の漁獲量の50%以上を占めており、特に重要な漁獲対象種でした。しかし、その漁獲量は、昭和32年の6,072トンピークに減少を続け、昭和61年以降には300トンを割り込み、平成11年にはピーク時の約60分の1の104トンにまで減少し」としているということです。

ところで最近、現在河北潟の周辺や干拓地には、外国から入ってきたタイワンシジミが増えています。時折、大発生して新聞の記事になったり、テレビのローカル番組で話題となったりします。（高橋 久）

NPO 法人河北潟湖沼研究所 15 周年記念イベント
車座ディスカッション「NPO 河北潟湖沼研究所は必要か？」
報告（前編）

石川県農業総合センターの中にある「ふれあいセンター」において、さる 11 月 29 日に車座ディスカッション「NPO 河北潟湖沼研究所は必要か？」が開催されました。二部構成となっており、第 1 部は、理事長高橋久より「河北潟湖沼研究所のこれまでとこれから」と題して河北潟湖沼研究所のこれまでの歩みと今後の活動の展望について報告があり、第 2 部は、パネルディスカッション「河北潟湖沼研究所への注文」として、河北潟地域においてさまざまな取り組みをおこなっている団体代表・個人をパネリストに迎え、河北潟地域における環境や産業の問題点からみて、NPO 法人である河北潟湖沼研究所が問題解決の担い手のひとつとして機能してきたのか、率直な評価をいただくとともに、河北潟地域における環境保全と地域振興の期待される方向や、そのなかでの河北潟湖沼研究所の活動について注文を述べていただきました。

報告及びディスカッションの要約を掲載します。

第 1 部 「河北潟湖沼研究所のこれまでとこれから」

河北潟湖沼研究所は、1994 年の 10 月に活動を開始した。最初は社団法人を目指してそのための発起人会を発足させた。その翌年には友の会をつくるなどの活動を展開し、98 年頃より NPO 法人を目指すことに方向を変え、99 年 8 月に石川県で 3 番目、環境分野としては初の NPO 法人として認可を受けた。

99 年には、パンフレット「河北潟将来構想」をつくった。これはとくに生態系の分野から河北潟の将来を構想したものである。2000 年には、河北潟で活動する多くの団体が加盟する「河北潟自然再生協議会」の発足にあたり、これに参加した。06 年には、干拓地農地の環境向上のための活動組織「グリーンアース河北潟」ができ、この構成員となった。09 年よりこなん水辺公園に自然解説員を配置するという一方で、金沢市からの委託を受けて活動している。

河北潟湖沼研究所を立ち上げる上で、その理

念や組織のあり方について 93 年頃からメーリングリストを使って、熱心に議論してきた。その中で 96 年につくった河北潟湖沼研究所のパンフレットには、「私たちは地域の環境問題の解決が地域の発展に繋がると考えます」「河北潟湖沼研究所は自然と共存した地域社会の発展を探究します」とある。さまざまな地域の問題を総合的に捉え、そのなかで持続可能な地域社会を提案するということが、私たちの作業であると述べている。また、地域に根ざした研究機関を目指していくことを重視した。河北潟および周辺地域の環境の現状の研究、および河北潟および周辺地域の環境保全と地域振興に関する研究をおこなう方針を掲げた。地域の環境問題を解決する上で、地域を構成する住民、研究者、行政、企業との共同が必要と考えた。また研究活動、地域活動、それらを支える事業活動の三本柱での活動を考えた。実際にはこれがそのとおりにはいかない難しさがあるが、設立当初からこうした理念を掲げていた。

99 年には、「河北潟将来構想」を発表した。パンフレットのタイトル「豊かな河北潟に、夢のある干拓地には」、潟と干拓地の両方を重視することが示されている。また、作成にあたっては、まず第一に、構想を練る前に河北潟の自然環境の現状を正確に把握することに努めた。河北潟の現状を注意深く調べるなかで、干拓・淡

（7 ページへつづく）



第11回 大切なヨシ

河北潟の東側に位置する集落、「潟端」^{かたばた}で暮らしてきた昭和4年生まれの坂野 巖さんに、水郷の景観がひろがっていた1950年代頃（昭和34年頃）までの潟端の自然と暮らしについて聞き書きしています。

よしふで葺いた屋根

当時は萱かやぶ葺き（ヨシで葺いた屋根）の家が多く、ヨシは大切な材料でした。萱葺き屋根は年月が経つと、材が腐ってくるため、新しい材と取り替える必要があります。潟端では、だいたい10年に一度の割合で葺き替えましたが、屋根全体を一度に葺き替えることはなく、片側ずつ交互におこないました。棟（屋根のもっとも高いところ）を境界にして片面全体を一度に葺き替え、その5年後くらいに反対側の屋根を葺き替えます。

屋根葺きは大勢で協力する作業です。人数としては、屋根の正面側に1人と後方に1人、横側に4人くらいと、その手元で手伝いする人が4人くらい、ほかに2人ほど雑用にまわる人がいましたので、合計12～13人くらいが必要とされました。また、やり方によってはバランスが悪くなったり、長持ちせず穴が空いて朽ちたりしますので、ベテランの力を頼りにしました。とくに屋根の角部分かどを仕上げるのは難しく、角を葺く職人が一番大事でした。潟端には、屋根正面側の角葺きの巧者である橋本宗太郎さん、後ろ側は中村茂吉さん、久保徳次郎さんという腕のある人たちがいて、この方々の都合を聞いて屋根葺きの日取りを決めていたようです。日が決まると、その一週間ほど前から稲架木で足場を組みはじめました。

毎年、梅雨が明けると、部落の2～4軒の家で葺き替えがおこなわれます。「どこそこの家が屋根葺きするがやと。」そんな話が伝わってくると、その親類の人と道で会った時には、「おはよう。また人手がいる時はいつてくれ。」などと、挨拶代わりに声をかけ合ったものでした。

葺き替えは1日で終わらせるつもりで早朝から段取りし、たいてい夕方遅くまでかかりまし

た。一日がかりですするため、昼食は葺き替すすえる家が準備します。作業に当たる人たちは煤で汚れましたが、座敷かまどに上がってお昼をいただきました。竈や囲炉裏いろりから立ち上る煙で、柱や屋根材などが煤けており、とくに煙出しのあたりで作業する人は真っ黒になりました。屋根材などが煙で燻されることは悪いことではなく、防虫、防腐、防水の効果がありました。

葺き替えにより、使い古したヨシ屑がたくさん出ます。葺き替えの仕事はそれらを舟に積み込んだら終わりです。1軒の屋根片面で舟一杯分くらいの屑ができました。ヨシ屑は、畑の肥料になるので、だれも粗末にしませんでした。畑の空き地に1～3年ほど積んで置くと、どの堆肥よりも効き目があると重宝がられました。

昭和初期の潟端の部落92軒中、萱葺きの家は50～60軒あったように思われます。その頃にも瓦で葺いた家はありました。戦後になって建て替えがすすみ、瓦屋根が増えていきました。

葦場（よしば）

ヨシは自然に生えてくる植物ですが、湖岸のヨシ原を「葦場」^{よしば}として各家で管理していました。屋根葺きに使うヨシは、それぞれ所有する葦場から調達します。各家では屋根葺きに備えて、毎年少しずつヨシを蓄えました。ヨシが足りない場合は、瓦屋根の家からヨシをいただくなどしました。水分のある状態では使えないので、ヨシが枯れた11月頃に刈り取ります。刈り取ったヨシは束にして、家の風雪が吹き込んでくる場所に立てて雪囲いにしました。一冬そのように使ってヨシを十分に乾燥させ、3月21日のお彼岸の頃を過ぎてから、天気の良い日を見計らって雪囲いを外し、アマ（家の二階の物置）や田んぼの空き地に積み上げて保存しました。

葦場の所有数は各家で違っており、坂野家では3面持っていました。葦場1面の単位は、地域によっても異なるようですが、潟端ではおよそ5m四方で、その横の長さは、ちょうど潟縁の田んぼの縁から、潟に向かってヨシが生えているところまでです。実際には5~7mくらいあり、舟の出入りや波風による浸食で、葦場の縁はうねっていました。少し深いところに株状に孤立するヨシもありましたが、それは管理しませんでした。葦場の境界にはむかしの杭がありましたが不明瞭で、刈り取りの時は、川で舟を動かす時に使う長さ5mほど(2間半ほど)の棹を目安に置いて作業しました。

葦場のヨシは毎年きれいに刈り取りました。それはたいしたもので、人様が刈り残したようなところも最後は全部なくなります。ヨシを刈り取る時は、葦場まで舟で行き、刈り取ったヨシを舟に積んで運びます。葦場1面分のヨシで、舟の半分ほどの量になり、2面ほど刈り取れば舟が一杯になりました。また、葦場3面あれば1軒の家で使う分が足りるほどでした。「葦場は絶えず管理しておかないと、来年ヨシが生えないぞ。」といわれ、非常に大事にしました。よく手入れされた葦場では良質なヨシがとれました。

葦場の地面は田んぼよりも少し低く、潟の水面よりも少し高い位置にありましたが、河北潟の水が増水すると、葦場まで水が上がり、そのときにゴミも一緒に流れ込んできました。潟の水が引くと、葦場にゴミが残されるので、冬も時々見廻りをして、ゴミを取り除きました。ゴミといっても現在のようなビニール類はなく、藁の腐ったものとか下駄や草履、空き瓶などです。とくに薬瓶(メモリのついた飲み薬用の空

瓶)が大量に流れ着きました。ゴミ拾いの時は、刈り取りの時と同様、舟で潟に出てから葦場に入り、舟にゴミを乗せて運び出しました。燃えるゴミは川畔で乾かしてから燃やしました。

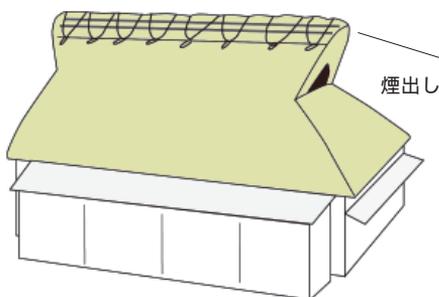
ヨシは、基本的に潟端のあたりよりも、アクスイ川より才田側(西側)のほうがりっぱでした。土質や塩分の違いからか、八田や才田側のほうがヨシの生育に適していたようです。

葦場は河北潟干拓事業・周辺排水改良事業をする時に、国が買い取りました。葦場を持っている人たちは、その時にみんな放棄しました。ただ、その頃はもう萱葺き屋根の家は5~6軒程度で、ほとんどが瓦屋根に変わっていたと思います。

そのほかの用途

現在みられるヨシは、ひ弱で風が吹いたら折れそうに見えますが、当時のヨシはりっぱで、屋根葺き以外にも活用されました。ひとつは壁の木舞(壁の下地の材料)です。良質なヨシは、壁屋さんが買いに来ましたが、潟端ではヨシを売る家は4~5軒程度で、たいていの家は売るほどの余裕はなく、自分の家の屋根葺きを使う分として大事に取っておきました。ヨシをカラムシの紐で編んだ葦簀は、縁側に立てかけて日除けに使ったり、梅干しを干すときなどに役立ちました。

また、竈や囲炉裏で火を焚くときの燃料としても重要でした。これには初穀や藁も使われましたが、藁がすぐに燃えてしまうのに対して、乾いたヨシは5~10分燃えることから好まれました。1m以上あるヨシは燃やさずに屋根葺き用に残しました。(聞き取り・文 高橋奈苗)



【棟】藁で作ったヌマヤムシロ、コモなどで丁寧に包んで、竹を置き、その上から太い八サ縄で縛った。



ヨシは「アシ」と呼ぶ地域もあるが、潟端では「ヨシ」と呼ばれた。

屋根の形状は、煙出しの窓のある構造(入母屋・妻入り)。
<坂野さんが描かれたイラストをもとに作成。>

8月29日(火)

この日の日の出は8時10分頃。日射しが強く暑い。8時半の気温は22度。

午前中はホテルの部屋で昨日までの野帳の整理をする。

午後は市内の観光とショッピングに案内されて、ラマ教寺院のガンダン寺、デパート、スーパーマーケット、ショッピングセンターを廻る。それぞれに興味があったが、私はスーパーマーケットで売られている果実、野菜がすべて輸入品であることに注目した。スイカ、リンゴ、オレンジ、レモン、バナナ、トマトなど、いずれもよく洗われていて品質もよい。中国の奥地の市場などで見られる、その土地の特産の、土や埃が付いたままのものはまったく見られない。かなり高価なこんな高級食品を買う社会層がモンゴルにも出来ているらしい。

市内を流れるトール川の支流に沿って建てられているスカイショッピングセンターは、日本でもあまり見られないような巨大なショッピングセンターで、買い物客も多い。さまざまな服装の人たちが見られるが、簡単な西欧風の服装が多い。ウランバートルも急速にグローバル経済の中に入ってきているを感じる。

この前を流れるトール川の支流は、両岸がほぼ垂直な板を立てたようなコンクリート護岸になっている。流れ幅は川幅の半分位で残りの河川敷は草地になっている。かつて日本の都市河川も同じような景観が多かった。これがモンゴルの気候や文化に合うものかどうか、今後の問題だろう。

夕方から、ホテルで現地の自然保護のオンギ川運動のNPO代表のムンクバイヤーさん達と打ち合わせをする。とくに9月上旬のオンギ川地域の視察について、具体的な日程などを打ち合わせる。

オンギ川は今年の7月は雨が多く、ゴビ砂漠に流れ込んでオンギ川の終点となっているフラーン湖にもかなり水が入っていたらしい。し

かし8月に入ると減水して、オンギ川の下流部はほとんど干上がったという。

今年の7月には水量がかなり多かった理由として、ムンクバイヤーさんは以下の3点を挙げた。(1)降水量が多かったこと、(2)住民運動によって流域の金鉱の操業を一時停止させたこと、(3)人工降雨を行ったこと。

ムンクバイヤーさんは来月の始めはモンゴルの環境保全団体のシンボジュウムがあるので、オンギ川の視察のさいは我々に同行できないが、メンバーのガラさんが案内してくれるという。

オンギ川運動の内容についてもいろいろと話を聞いた。この運動にはドイツの「緑の党」が支援していて、そのメンバー(元議員)がモンゴルに駐在しているという。その支援の内容(資金的?技術的?)については、具体的なことはよく分からなかった。

現在、オンギ川地域のサジの栽培を勧めて、その加工産業を大きく発展させて住民の生活を援助することを運動の基本としたいと言っている。

オンギ川流域のサジの栽培を拡大することについては、私は別の意見があるがそれは別にまとめて書きたい。この夜は議論が長引いたので遅くなる。寝る前に室内の気温を測ると26度であった。



スーパーマーケットに並ぶ輸入青果物

8月30日（水）

朝から雲ひとつ無い好天である。前夜は遅くなったので起床も遅れる。

この日は現地の市場を見てから、モンゴルの工業見本市へ行く。

市場は先日のショッピングセンターとは違って、地方色の豊かなアジアのパサール風のところだった。衣料が多いが大半は輸入品らしい。

見本市は工業とはいっても、家具や建築材料が目立っている。木材は土地の産物だろうが、それを造っている企業は外国資本のものが多

く、この国が今後どのような方向に進むべきかをいろいろと考えさせられた、

モンゴルの重要な産業である特産の羊毛を用いたカシミア製品は、この国らしいものだった。ただその用途やデザインを見てみると、古い伝統的な製品も大切だが、輸出向けにはもう少し工夫が要るのではないかと感じた。かつて日本の重要な産業であった養蚕が、絹織物というその用途とデザインにとらわれていたために、化学繊維の発展に圧倒されて衰退したことも参考となるだろう。



ウランバートル スカイ・ショッピングセンター



ウランバートル ガندان寺（ラマ教寺院）

（3ページのつづき）

水湖化により失われたものもあるが、干拓事業により新しく生じた環境の中にも優れた点があることを知り、たとえば希少猛禽類のチュウヒは、干拓後にできたヨシ原の環境に新しく入ってきた鳥であることもわかった。それらをまずはフラットにみることから始めた。

第二に河北潟が農地であることを重視した。実際、河北潟の野生生物の生息環境は、農地であることにより維持されている側面が大きく、基本的に干拓地が農地であることを前提とした。第三には再生の目標を、「潟と生活の接点を取り戻すこと」とした。第四に実現可能な案とすることに重点を置いた。河北潟の現在の形を大きく変えるのではなく、実現可能な小規模の改良による環境の改善ということを重視した。

河北潟湖沼研究所の定款には3つのユニットがある。1つはNPO法人としての仕組みとして、総会があり、会員がいて、理事会があって、事

務局、それから研究課題や地域のビジョン等を考えるものとして基本課題検討委員会というものをおくこと。実際にはそんなにうまく機能しているわけではないが、定款のイメージの中でこのようなことを掲げている。

NPO 法人になった実際的な理由は他に選択肢がなかったことである。社団法人をつくるにはいろんな企業の協賛が必要であったが、それがなかなか難しかった。また、本来の大事な理由として、環境問題を解決するには新しい枠組みが必要だろうということがあった。行政的なあるいはその他の地域の意志決定において、専門家だけでなく、住民もそこに入っていくということを重視するというので、NPO が適してい

（8ページへつづく）

河北潟の湖面利用を考える集い

河北潟自然再生協議会の呼びかけで、今年の6月27日、10月17日、今年の2月7日に湖面利用を考える集いが開催され、研究所メンバーも積極的に参加し、協議してきました。利用者、行政、住民、NPOが集まり、自然環境に配慮した、皆が尊重できるルールづくりを進めています。

2009年度の外来植物の除去活動について

昨年に引き続き、2009年度も11月から12月にかけてチクゴスズメノヒエの除去活動を行いました。4回の活動でのべ110人が参加し、東部承水路沿いの農排水路では、ほぼ完全にチクゴスズメノヒエを取り除くことができました。

また今回は、関連する取り組みとして、除去活動に参加している人たちを中心に、琵琶湖で取り組まれているナガエツルノゲイトウの駆除活動の様子を視察しました。河北潟湖沼研究所としては初めてのバスをチャーターしての視察でした。研究所メンバーのみでなく、大学生や農家、土地改良区の職員や金沢市職員の方も参加し、有意義な視察となりました。

河北潟のお話会

河北潟水質連絡協議会が主催する「河北潟のお話会」が、2月6日にこなん水辺公園管理学習棟で開催されました。研究所から高橋久理事長と永坂正夫氏が講師として招かれ、河北潟の変遷や昔の様子、水辺の生きものや水草についてお話しました。当日は吹雪であったにもかかわらず、40名もの方が聞きに来られました。

イベントのご案内

第71回河北潟自然観察会

日時 2010年4月4日(日) 9:00 ~ 12:00
 集合 こなん水辺公園(金沢市東蚊爪)
 内容 恒例行事です。野鳥観察が多いですが、暖かければ、水辺の観察もできるかもしれません。

(7ページのつづき)

るのではないかと考えた。また、行政には縦割りの問題がどうしても出てくるが、そこを打ち壊す部分というのはNPOが非常に大事で、様々な主体の接着剤になれる。

河北潟湖沼研究所の最近の活動については、1つは研究、地域の環境問題を科学的に捉えよう、2つめは研究の活用、市民の科学としての研究成果の活用の取り組み、3つめは実践、研究成果を実践の中で検証し、新しい公共としてのNPO活動がある。

研究所のこれからについて話し合うために、理事会内に3つのワーキンググループ(WG)を2009年度最初に設置した。その中でビジョンWGでは、河北潟地域におけるビジョンをつくり、そのなかでの研究所のあり方や目標を決めていこうとしている。理事長としては、WGの答申を待って全体のビジョンと目標を考えていくということになるが、今の段階での個人的な考えを述べる。1つは干拓地における目標である。河北潟干拓地における農業活動と自然再生の統一ということを考えている。「湖に戻す、けれどそれが農地である」というようなこと。2つめは河北潟の周りにおける目標である。地域全体の地形と流れのバランスを取り戻す。災害に絶えられる地域を目指す。絶対に浸水がおきないということだけでなく、災害に絶えられるような構造は何かを考える。ポンプで汲み上げないと維持できない部分、これを長期的に正常な形にもどしていく方向を考えている。3つめは今後事業をおこなっていくことも考えているが、方向としては河北潟における持続可能で生産的なモデル事業をするというので、農業への参加、環境修復に関わる場所での事業展開を考えている。

編集後記

毎度のことですが、発行が遅くなって申し訳ありません。設立から15年が経ち、NPOとしての役割もますます重要です。(高橋)

